

## コッツウオールド・ウエイ南端から北端へ

日本でも最近フットパスという言葉をよく聞くようになってきた。日本における広がりには、主に英国のものをモデルとしている。英国では少数の大地主が膨大な土地を占有するなか、近代化とともに多くの人々が農地から都会へと移り住むと、余暇には美しい自然景観のなかでリフレッシュしたいという欲求が高まり、地主に対して散策する権利、長い歴史のある道の使用权を主張し勝ち取られてきた。今でも地主に反対されることなく20年間使い続けた実績があれば、パブリックフットパスとして認められる制度があるので、毎年フットパスの数は増え続けているという。

今年の二月には東京で「日本フットパス協会」も設立されたが、日本でのフットパスづくりの目的は英国のものとは異なり地主と対立の構図はなく、自分たちの住む地域の自然、歴史の再発見とそれらの保全への意識の高まり、地域経済への貢献を目的としている。

私は5月の24日に英国コッツウオルズ地方のBATH（バス）に到着し、次の日25日から30日までの6日間でコッツウオールド・ウエイ164kmを北端のチップング・カムデンまで歩いてみた。英国には数多くのパブリック・フットパス（散策路／自然歩道）があるが、コッツウオールド・ウエイは、その設立、維持、広報に英国政府も参加する「ナショナル・トレイル」で、長距離遊歩道になっている。コッツウオールド・ウエイは1998年にナショナル・トレイルに昇格した。現在英国には13本のナショナル・トレイルがあり、合計4,000キロほどになる。コッツウオールド・ウエイは短い方で、最も長い「南西海岸パス」は1,008キロもある。

コッツウオルズ地方を歩いていると左の写真のようなサインを見かける。これはこの地域が「Area of Outstanding Natural Beauty」つまり「自然風景が特別に美しい地域である」との指定を受けたことを示している。この指定は1966年に与えられ、1990年に指定地域が拡大されている。現在コッツウオルズ地方の総面積は2,038平方キロ。毛むくじゃらの羊はコッツウオルズ地方のシンボルマーク・マスコット。

24日、バス(BATH)に到着。この町の中心部は1988年に世界遺産に登録されている。私は中心から歩いて20分程度の住宅街にある民宿(B&B)に宿泊。ここはバス市民が泊る場所なので観光とは別の顔が見られるし、丘の上なので眺めがよく、宿をここに決めてよかったと思った。到着すると家族は庭で日光浴をしながら談話中だったが、すぐに冷たいビールが振る舞われ、仲間に加えてくれた。

この日私はどうしてもBATHでしたいことが2つあった。一つはコッツウオールド・ウエイの載ったOrdnance Survey（英国政府地理測量部）が作成した二万五千分の一の地図を購入すること、もう一つはBath Abbeyという教会の祈りの時間に参加することだった。1:25000という縮尺は、4cmが1キロなので、歩く行程のかなり詳しい情報が手に入るの、フットパスを歩くときの大きな味方。

4時頃だったろうか教会ではEvensongという「夕べの祈り／晩禱」に参加することができた。コッツウオールド・ウエイを南から北へと移動する私に取ってはこの教会が出发点であり、北から来る人々には終着点となっている。晩禱では長い説教はなく、聖歌隊が礼拝式文を美しいハーモニーで歌い上げ、ときどき天使の声かと思われるような透き通ったソプラノが俗世間とは違う領域を感じさせてくれた。しかし教会を一步出ると、街は観光客でごった返してい

た。私はここを出発点としてより静かなチップ  
ピングカムデンへ向かうルートを選択してよかつ  
たと思った。(写真:クレセントは長いので写  
真では半分も入っていない)



25日 朝食を8時に取り、9時頃に出発。宿  
の主人が市内のロイヤル・クレセントまで車で送ってくれた。ここは本来の出発点ではないが、昨日のうちに街を歩  
いたのでよしとする。ローマにあるパチカン市国の聖ペテロ大聖堂の前には、二つの半円からなる円形の広場がある  
が、このロイヤル・クレセントはその片方をイメージして造られた。1700年代の後半に連棟式の30世帯の住宅  
として建てられた。そしてロンドンのリージェント・パークの南にあるクレセントはこのBATHのクレセントを模倣し  
たものだという。



ここからは北へと直線的な移動になるので、荷物をどこにも預  
けられない。全て背負って移動しなければならぬ。荷物はそ  
の重量を肩にかけると体力をすぐに奪われてしまう。バックパ  
ックについている腰帯を骨盤の所できつく締め、重量が均か  
けるようにするのがコツ。

街の中ではトレイル(自然歩道)は小刻みに曲がっているので、  
地図はあまり役に立たない。ここはガイドブックの説明に頼  
った。英国の他のトレイルもそうだが、コッツウオールド・ウエイ  
の標識も、全て然るべき箇所についている訳ではない。90%

程度だと思う。しかし逆にこの程度の方が緊張感があり、地図やコンパスを真剣に見ながら歩くので時にはチャレ  
ンジグで返って楽しい。

Weston(ウエストン)と呼ばれる所までくるとやっとバスの郊外も外れにきたという感じになった。ここからは地図  
と磁石が多いに役に立つ。しかし、バスの街を出る前から急ではないが登りと下りを繰り返している。コッツウオル  
ド・ウエイの大部分はescarpment(エスカープメント)と呼ばれる傾斜地谷間に置かれている。東京の世田谷には  
「国分寺崖線」というくねくねとうねる崖があるが、それは多摩川の以前の流れによって削られてできたもの、こ  
ちらのものは断層と浸食によってできたものだという。

この日の行程の3分の2程度に達したときに、水筒が空になってしまった。コールド・アッシュトンという小さな村  
を通過したときに、道路沿いで庭仕事している人に近くにお店がない  
か訪ねたが、ここにはないということだった。しかし私の姿を見て、  
コッツウオールド・ウエイを歩いているのかと訪ねられ、15分に及ぶ  
会話が始まった。実は店で水を購入したかったことを告げると、庭に  
招き入れられ、家の中へミネラルウォーターを取りに行き、今度は奥  
さんと一緒に出てきた。好意に甘えたが、このような出会いもフット  
パスを歩く楽しみの一つだと思う。

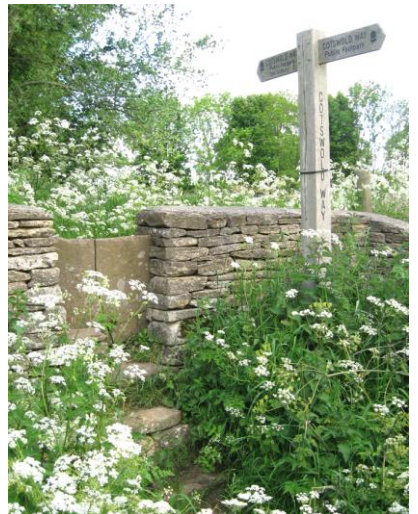




そこから4キロぐらい歩いた所にナショナルトラストが管理する素晴らしい庭付きのお屋敷のある Dyrham Park (ダイラム・パーク?) があり、観光客が庭を散策しているのがゲート越しに見えた。一日30キロ歩かなければならぬ自分には立ち寄る余裕はなかった。ここはジェームズ二世の娘メアリー二世とオランダから迎えられた夫ウィリアム三世のお屋敷で、17世紀のオランダからもたらされた品々が見られたはずであった。余裕のない計画を立ててしまったことが悔やまれる。

後で考えると、一日の行程としてはここまでで十分であり、お屋敷と庭を見学して近くの宿に泊まるようにする方がよかったと思った。その日の私の宿はさらに6キロほど先のトーマートン村。4キロほど行った所で、油断をして地図を確認しなかったことから、畑の中にある、途中で直角に曲がるポイントを見逃してしまった。直進した所にゲートが見えたので、ついそこまで歩いてしまった。疲れているときに戻るのはいけいけれども、分からなくなったら、最後に確認できている標識まで戻った方がよい時が多い。宿についたら7時を過ぎていた。

26日 この日はこの写真にある石灰岩の stile (スタイル:踏み越し段) を越えることで村からトレイルに入った。スタイルは多くの場合、家畜には越えられず、人間だけが踏み越えられるように作られている。次の宿は今回の旅程で最も短い距離であるので、この日ばかりは余裕がある。コッツウオールド・ウエイには含まれていない チッピング・ソッドベリー(Chipping Sudbury) という町に立ち寄ってゆくことにした。約6キロの寄り道である。このトレイルの終着点のチッピングカムデンをはじめ、チッピング・ノートンなどコッツウオールズ地方には「チッピング」という名前が始まる地名があちこちに見られるので、その意味を知りたいと思ったし、トーマートンの宿の主人から市の立つ素晴らしい町であると聞いたので、是非寄りたかった。



広場に十字架が見えたが、それは戦没者記念碑で、そこからタウンセンターが始まる。小綺麗な町だけれども洗練されているというよりは、庶民的。来てよかったと思った。まずインフォメーションセンターまで行き、[chipping]の意味を訪ねると、「マーケット・タウン」の意味であるという。この町の基本設計(タウン・プランニング)は1100年代のもので、12世紀に市を立てる許可が下りてから



「チッピング」が名前の前に冠されたという。町の「銀座」にあたる High Street を全て歩いて7分程度しかかからない。オーガニックな感じのパン屋さんがあったので入ってみると、いかにも職人意識のあるパン屋さんが焼くようなパンが並んでおり、驚いたことに100%ライ麦のパンがあったので、これを一つと手作りのバタースコッチクッキーをもらった。またスーパーに入ってこの地域で作られたリンゴジュースを購入。(写真:時計の塔のある建物がインフォメーションセンターで、その前の駐車スペースに毎月最終木曜日に市が立つという)

コッツウオールド・ウエイは98%が畑を含める自然の中にあると言っていいだろう。しかし私には自然だけではつまらない。この辺りで、この町に寄ったことで文化的・歴史的な要素も感じる事ができ多くに満足した。フットパス

の地域経済への貢献能力を考えると、散策路を積極的に村や町に通しても良いのではないかとと思われる。歩く方もそれぞれの地域の特産品を味見したり村の文化財を見たりしたいと思う。地域の自然も歴史も文化も味わうように歩けば、地域経済へより貢献する可能性が高まる。

この日は土に埋もれたローマ軍の城壁の遺跡や大きな麦畑を通過して目的地の Lower Kilcot に到着。実はこの日の宿がもっと先の Wotton-Under-Edge にあるものと勘違いして、宿を取ってしまったが、私が泊まった宿の中で最も楽しい B&B だった。現在この民宿をしている夫婦は定年した高校教師で、35年前にこの古いかなり傷んだ農家を買取り、家族で改善してきたものである。ここは近くに店もパブもないので、夕食はここでとることになっていた。夫妻の他に長男とタイ人の奥さんと子供も一緒に住んでいるので、ここは三世帯住宅になっている。奥さんは現在タイに行っており、7歳の娘さんは友人の家へ泊まりに行っていたので、その日の夕食はご夫妻と長男と私の4人で、ゆっくりといただいた。(写真:私が泊まった部屋の窓を見るとこの家の壁の厚みがわかる) この家族の人柄といい、35年もかけて改築を重ねた家の面白みといい、とても楽しい滞在ができた。

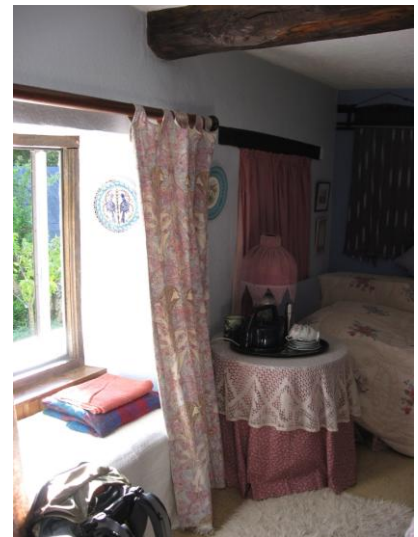
27日 残念ながら雨の中の出発。牧場の横を通過すると以前スコットランドでみかけた赤毛の肉牛 Highland Cattle (ハイランド牛) がいるのではないかと。イングランドで見かけると思わな



かったもので、少々意外。また一時間ほど行くと、こんどは見たこともない焦げ茶色の斑点のある羊がいる。後で、羊の品種一覧ポスターで確認してみると、Jacob (ヤコブ) という種類と思われる。昼過ぎまで歩くと Wotton-Under-Edge という小さな町に到着。この Wotton (ウトン) という名前は「ウール・タウン」が訛ったものだと言う。羊毛によって富を築いたコッツウォルズ地方を代表するような名前だと思った。その後続く under-edge の「エッジ」は Wotton Hill と呼ばれる急斜面のことだろう。意識すると「丘下のウトン」ということになると思われる。この町ではパブに入り、スープとサラダを注文した。待っている間にハーフ・ポイントのビールを飲んだ。残念ながら地ビールを置いていなかったが、私は必ず地元の樽抜きがあるかどうか尋ねることにしている。

昼を過ぎると雨はやんだが、空は低い圧迫感のある雲で覆われている。丘に登ると風も強い。丘の上に石造りの塔が見えてきた。十字架が先端にあるので William Tyndale (ウィリアム・ティンデル) の記念碑だと分かった。ティンデルは16世紀、聖書を原語のヘブライ語とギリシヤ語から英語に訳し、印刷機で普及させたことにより、逮捕され処刑された学者である。丘の上には誰もいない。塔の中に入ると上の窓のところまで螺旋階段があったが、中は真っ暗で風がひゅーひゅーと唸り気味が悪くて登れなかった。このような塔は monument (記念建造物) として地図に載っており、歴史的・記念建造物の保護を担当する政府機関である English Heritage (イングリッシュ・ヘリテージ) かナショナルトラストがその保全に関わっていることが多い。

は誰もいない。塔の中に入ると上の窓のところまで螺旋階段があったが、中は真っ暗で風がひゅーひゅーと唸り気味が悪くて登れなかった。このような塔は monument (記念建造物) として地図に載っており、歴史的・記念建造物の保護を担当する政府機関である English Heritage (イングリッシュ・ヘリテージ) かナショナルトラストがその保全に関わっていることが多い。



この日もあまり人と出会わない。一人でトレイルを独占しているような状態が続く。平均して二時間に一組の人々と行き違う程度である。小さな村を通り過ぎた時カナダからコッツウオールド・ウェイを歩きに来た四人の女性らに出会った。彼女たちは北から BATH を目指している。見るとデイパック程度しか持っていない。宿から宿へ荷物を運搬してもらうサービスを利用しているという。実は出会った外国の人々は皆軽装だった。同じサービスを利用しているのだろう。こんな所でも歩くことが地域経済に貢献しているのである。



28日 昼近くに楽しみにしていた「コッツウオルズの女王」と呼ばれる Painswick (ペインズウィック) に到着。まず村で一番目立つ建物である聖メアリー教会に入った。日本のお寺も門をくぐってその境内に入るようになっているが、駐車場の方から来るとこの教会も門から入っている。また村

の中心の方から入るときはイチイの刈り込みが門になっていた。庭には99本のイチイの木が植えられている。イチイは何百年にもわたる寿命があることから「不死」のシンボルとなっており、教会の周りの墓地によく植えられている。(写真:二つの門)



村を歩くと上品さが漂っている。カフェでケーキを食べコーヒーを飲んだが、久しぶりに洗練された時間をもった。歩いていると Best Kept Village (最も保存状態の良い村) の看板を見かけた。この評価は CPRE (Campaign to Protect Rural England 英国の田園地域を保全するキャンペーン) というチャリティー組織が毎年行っているもので、1930年代都会化が地方に広まったことに危機感を覚え、田園地帯の環境保全運動として始まったという。



ペインズウィックを出て1時間ぐらい歩いたらどうかこれで三つ目だろうか、ゴルフ場の中を横切り、その外れの芝に座ってピクニックをした。草の上に座ると何かが私の腿をさした。脚を上げるとそこには、地面に張り付くように刺のある植物があった。後で人に尋ねるとこれはアザミの種類で、俗名「picnickers' peril (ピクニックする

者への危険)」と呼ばれているという。ぴったりの名前だ！ 私のお昼は、ライ麦パン、チーズ、北海道から持って行った乾燥させたシャケの切り身にクルミなどの木の果実。

その後しばらくすると野生保護区になっているブナ林を通った。日本では北海道の黒松内がブナの北限だが、ここは緯度で8度ほどさらに北に位置している。北米からの暖流のお陰で北欧にもブナがあると聞いている。コッツウオルズにはヨーロッパでも代表的なブナ林とイチイの森がある。





(写真：ブナ林の中では所々で、白い花をつけた行者ニンニクの大群落を見かけた)

さらに歩くと開けた草原にアクセスランド (Access Land) のサインがあった。2000年から英国の森、ヒースやムーアと呼ばれる荒地、ダウンと呼ばれる石灰岩を覆う草原自由に散策できる法律が施行されている。そのような箇所は地図にも記載され、トレイルだけに限らず面として散策できるようになった。

この日は良く歩いた。夕方の8時を過ぎてもまだ1時間ぐらいは歩かなければならない。森に入ると薄暗いので少々不安になるが、こちらは夜の9時半近くまで明るい。そのお陰でこんな少々愚かな強行軍ができるのである。9時半にチェルトナムの東、車で30分ほどの所にある Whittington (ウイットینگトン) のファーム・ステイに到着。農家だけれども今回泊まった宿の中では、このお宅が最も豪華。(左下の写真) 豪農のお宅である。以前訪ねたことのあるウィリアム・モリスのサマー



ハウス「ケルムズコット・マナー」を少々モダンにしたようなお宅だと思った。この晩ベットにうつ伏せに寝ると、私の足と足の指が、筋肉を伸ばしたりほぐしたりすることを求めて勝手に動いていた。

29日 この日、朝食はご主人が用意してくれた。どのような農業を行っているのか尋ねると、小麦を造る他に生物の多様性を促進することに 관심이あり、特に野鳥が増えるような農業をしているという。すなわち、鳥たちが食べることのできる種をつくる作物を植えているのだという。実は今年から2013年まで、英国政府は生物の多様性に貢献するような

農地改良に29億ポンドの予算をつけたので、この目的にかなう農業には補助金がでているのである。このような政策は英国のフットパス周囲の環境をより豊かにしてくれることだろう。生物



の多様性と言えば、今回これまでに野生のキジ、狐、ノロ鹿、ウサギ、キツツキ、リスに出会っている。

この日はウインチコムまでの行程で、距離は比較的短い。ウインチコムにはどうしても訪ねたい Tea House がある。閉店が午後の5時なので、4時半頃までに到着したい。お昼頃、Bishop's Cleeve (ビショップス・クリーブ) という町の東にあるクリーブ・ヒルを歩いていた。ここがコッツウオールドウエイで最も高い所で、標高325メートル。この辺りでは以前石灰岩を切り出していた所もある

るので、エスカーPMENTと呼ばれる断層がむき出しになっており、地学的な成り立ちが観察できる。ここでは歩く人々よりもマウンテンバイクに乗る人々を多く見かけた。丘を降りるとコッツウオールド・ウエイはぐるっと大きく南に180度カーブしてしばらく行き、西に折れてからまた北上を始める。南に行くのは少々もったいない気がした。(勘弁して!)

コッツウオールド・ウエイをこの辺まで北上してくると、麦畑の緑と菜の花畑の黄色いパッチワークが波打つ大地に広がる風景に良く出会う。とてものもどかである。しかし、脚はもう棒になっており、今日は初めてお尻の筋肉まで堅くなっている。英国人に My legs have become sticks

と言っても通じないだろうと思いつつ歩き続けた。



ソラマメ畑の中の道を行くとウインチコム村の村はずれにある Sudeley Castle (スードウレイ城) が見えて来た。ここまで来ればあと一息。何とか

閉店までに目当ての Tea House に行けそうである。そのお目当ての店は米語のメインストリート

を意味する High Street にある。宮脇夫妻と娘さんの樹里さんの家族が経営・まかないをする店である。店にはコルドン・ブルーのロンドン校で調理を学んだ樹里さんの名前がついている。昨年英国の Tea Council (紅茶審議会) がこの店を「ベスト・ティー・プレイス」として表彰したことで、日本の新聞にもその記事が載り、以前から気になっていた店であった。

ご主人は私と同じ札幌出身。店内は室内から天井にぶどうの蔓が這うサンルーム、そして裏庭へと三段階に少しずつ降りていることが空間にバラエティーを与えている。英国の一般庶民の生活圏において、手間のかかる“こだわり”にはほとんど出会わないが、ここは日本人的な細やかさとこだわりが感じられる。おいしいスコーンと紅茶をいただくともう閉店になってしまったが、久しぶりに日本語が話せる機会でもあるので、少しご家族と話をさせていただき、とても楽しい一時を過ごすことができた。(写真: High

Street にある Tea



House。宮脇一家と室内)



30日、最終日。9時前に宿をでて歩き始める。この日はスタンレーハウスというマナーハウスの少し南でナショナルトラストのJo Burgon（バーゴン）さんと合流し、一緒にチップング・カムデンまで歩くことになっていた。彼は今年の二月に東京の町田で「日本フットパス協会」が設立された際に、記念シンポジウムにゲストスピーカーとして招かれた方である。彼の車をチップンカムデンに置いて、奥さんの車で約束の場所まで来てくれた。一人で歩くのも良いし、友達と話をしながら歩くのもよい。一人の時は少々淋しさがあるが、その分周囲を感じる感覚が澄んでいるし、自分だけの責任で歩くのも良い。しかしバーゴンさんはこのトレイルの監督官も兼ねているので、いろいろと質問ができるし、とてもユーモアがあり一緒に歩いて楽しい。（右の写真：スタントン村の茅葺きの家）



一緒に歩き始めて2時間ほどで、コッツウォルズで最も美しい村の一つと言われるスタントン村についた。家と庭をゆっくりと眺めながら坂の上のパブに到着。ここでスープとビールをいただいた。歩く時は一人でも良い私も、食事のときに仲間がいるのはとても嬉しい。スタンTONの教会は9世紀からあると言われている。ゆっくり面としてこの村を見て感じたいが今回の計画では許されない。私たちは線としてのトレイルを歩き続けた。

英国のフットパスのほとんどが私有地の中にあることは知っているが、時々所有者の居住建物のすぐそばを通ることがあり、歩く人々と土地所有者の間の衝突が起きることが予測できるような場所がある。（右下の写真はブロードウェイの手前で通過した農家の敷地：農場主と出会うのも不思議ではない。実はこのゲートの横にコッツウォルズ・ウェイの標識があったが、その標識の柱は納屋から掻き出した汚れた敷きわらで覆われていた。明らかに地主の気持ちを反映させるデモンストレーション。左の写真は前の日に撮ったもので、この看板は、私有地



にドーベルマンを放してあることを知らせ、通行人が入らないようにしている。

トレイルを歩いていると多くの人々とすれ違うことはなかったが、ブロードウェイに着くと観光客で溢れるようだった。これはスタンTON村も同じだった。車で来ることができるところはやはり人が多い。「ブロードウェイ」と言えばニューヨークを思い出す通りの名だが、英語の意味は「広い道」。何故この村にそのような名前がついたのだろうか。答えは村の東にある丘にある。昔馬車で丘越えをして村に入る場合、坂が急でかなり高いので馬車を引くために、さらに馬を一頭ない



し二頭馬車の横につけて引かせる必要があったことから、丘を越える道は「ブロードウェイ」でなければならなかった。南からコッツウォルズウェイを歩いてくると、まず村の目抜き通りを通り抜けてから、この急な坂を登ることになる。（写真：ブロードウェイの目抜き通りとバーゴンさん）

この日（5月30日）私の滞在中で初めて暑くなった。日差しも強い。歩いているとバーゴンさんが野生のランを見つけて教えてくれた。また、フットパスの道路表面はそれ



それぞれの county (州/県) の Highway Authority (道路管理組織) がメンテナンスを担当し、道を覆う雑草の刈り込みは地主の責任であることを教えてくれた。

(右の写真：野生のラン)



夕方6時を回っていたが、菜種畑の向こうに最終目的地のチップンカムデンが見えて来た。教会の塔がよく見える。最終到達地点は村の中心にある1627年に建てられた石造りのマーケット・ホール。チーズ、バター、鶏肉などを売るために利用されたという。六日間よく歩き通した。お祝いをするためにパブに行ったが、お祭りをやっている、ビールを買うために長い行列ができています。そこで車でスノーヒル村へ移動することをリクエストした。途中広いラベンダー畑の横を通った。来月の7月には花をつけてカラフルになるだろう。この辺は富良野や美瑛に似ていると思っていたが、ますます似ている。

スノーヒルには一軒だけパブがある。地ビールで乾杯することにする。このビールは名前も Local'。最後の二文字とアポストロフィーはビールを表す Ale のこと。組み合わせで「ローカル」にしているところが面白い。ソフトな口当たりで美味しい。締めくくりにぴったりのビールだった。



自然歩道を歩いてすれ違った人々は、英国人と同じ数かそれを上回る数の人々が外国人だった。日本でもフットパスを整備する自治体が徐々に増えて来ており、ネットなどでもそれぞれの散策路・遊歩道を紹介しているが、これからは英語などでも紹介して、外国の人々にも歩いていただき、地域経済に貢献していただければ良いと思う。



個人的には、歩き通してみても、歩き始めた時と比べて、あまりハアハアいわなくなり息がはつきりと楽になっている。体力、特に脚に自信を持てるようになった。地図と実地の地理もより噛み合うようになった。私にとって自分の体力や地図と相談しながら自分と向き合った時間と出会った人々との時間が、フットパス歩きがくれた最も大切な贈り物。驚いたことにお腹の脂肪がなくなっていたが、これはありがたいおまけであった。

小田 高史 通訳  
札幌市在住



コッツウォルズ地方の外れにある Swindon（スインドン）にある  
ナショナルトラストの本部のバーゴンさんのオフィスにて。

コッツウォルド・ウェイで最も標高の高いクリーブ・ヒル  
の見晴らしポイントにて。イングランドのシェフィールド  
からコッツウォルド・ウェイを部分的に歩きに来ていたカ  
ップル。

Copyright © 2014 National Trust